2022年度「卒業生アンケート」の結果について

―大学・短期大学部および企業向けアンケートの結果―

2023年7月

キャリアセンター　教育開発支援センター

2022年12月にキャリアセンターと連携して卒業生および企業に対するアンケート調査を実施した。今回は、2020年3月に卒業した16年度生および短期大学部の18年度生を対象に依頼した。質問項目は大学生活の充実度を問う質問をはじめ、社会に出て感じて抱く、大学在学中にもっと身につければ良かった能力・資質に関するものを中心に本学における質向上に資する設問とした。また、2022年度より、企業向けアンケートにおいて、教育開発支援センターが実施する成長実感調査で使用する汎用的能力12項目を用いた。これは、在学生の学修成果の可視化に加え、本学の卒業生が社会や時代の中で求められている能力や資質を明らかにして教育現場にフィードバックすることで、教育の適切性を在学時と卒業後にダブルチェックして、教育の質向上に役立てる「実学教育型の内部質保証」を目的としている。

１．調査の概要

(1) 実施時期：2022年12月23日～2023年2月28日

(2) 調査方法：Googleフォームを使用して作成したアンケート

(3) アンケート回答数および回答率

表1. アンケート回答数および回答率

	対象	依頼数	不達数	回答数	回答率
大学	16年度生	912名	71名	91名	11%
短期大学部	18年度生	40名	4名	14名	39%
企業	2019年度卒業生が就職した企業	303社	17社	86社	30%

２．卒業生アンケート（大学）

(1) アンケート回答者の属性

91名の回答者の男女比は7：3で、入学時の割合（8：2）に比し女性の回答率がやや高かった。業種については、サービス業、小売業、情報通信業をはじめ、多岐に及んでいる。また、職種は営業・販売職が回答者全体の約4割を占めている。就業者のうち、正社員と公務員が合わせて69名（76%）を占める一方で、非正規雇用で働いている卒業生も12名（13%）いる。また、在学中の課外活動の有無については、「活動していた」が47名（52%）であった。さらに、離職・転職について、1年以内9名(11%)、2年以内11名(13%)、3年以内7名(9%)の合計27名(33%)が「離職・転職した」と回答した。離職の理由は、「キャリアアップのため」、「労働時間などの労働条件に不満」が多かった。就職前の企業研究を十分に行えば離職を回避できていたと思われるケースがあり、このあたりは、学生の企業研究のあり方に留意した指導や支援内容をさらに強化すべきであろう。

(2) 調査結果の要約

① 大学生活の充実度

4点尺度による測定の結果、「非常に充実していた」の割合は42.9%であり、2021年度の33.3%から約10%増えた。また、「ある程度充実していた」の割合は45.1%で、合わせて88.0%が肯定的な回答を寄せた（図1、表2）。

表2. 大学生活の充実度について（学部・学科別）　（人）

学部・学科	1	2	3	4	合計
商学部	5	3	0	1	9
経営学部経営学科	2	8	0	1	11
経営学部ホスピタリティ経営学科	8	2	0	0	10
経済学部	10	12	1	2	25
法学部	5	5	2	0	12
外国語学部	5	2	2	1	10
国際学部	2	4	1	0	7
情報学部	2	5	0	0	7
合計	39	41	6	5	91

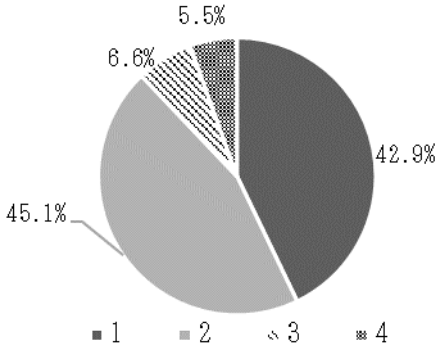

図1. 大学生活の充実度について

註）1. 非常に充実していた、2. ある程度充実していた、3. あまり充実していなかった、4. 充実していなかった

② 大学時代の学修が全体として現在役立っているか

「非常に役立っている」と回答した卒業生は 15.4%で、2021 年度の 9.4%から約 5%増えた。また、「ある程度役立っている」の回答は 61.5%で、合わせて 76.9%が肯定的な回答を寄せた（図 2）。日常生活の中では、大学での授業が役に立つという自覚は少ないのかもしれない。しかし、物事を多面的に捉える能力や複眼的な思考を大学における学修と関連付けて捉えたり、自覚したりすることを意識させる必要があるかもしれない。

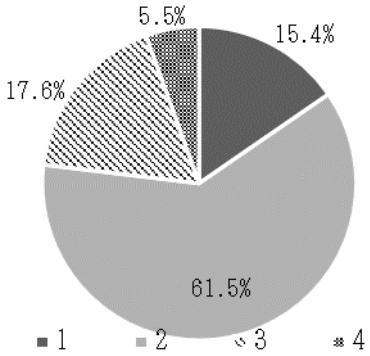

図 2. 大学時代の専攻科目、語学、共通科目（一般教養）、ゼミナールなどで学んだことや経験は、総合的に、どの程度役立っていると思いますか。
註）1. 非常に役立っている、2. ある程度役立っている、3. あまり役立っていない、4. 役立っていない

③ 大学で良かったもの、悪かったものを選択する設問

大学で良かったと思うこと、悪かったと思うことを 3 つ選択する設問に対する結果を表 3 に示した。また、図 3 は大学で良かったと回答する卒業生の多い順に並べ替えたもので、その項目を悪かったと答えた件数もあわせて示した。⑨キャリアサポート、⑪課外活動、①教員のサポートを「良かった点」として挙げる卒業生が多い。また、施設面では、アンケートに回答した卒業生のうち約 3 割が⑥図書館を選択し、満足度が高い。④キャンパスの雰囲気、③教育施設を挙げる卒業生も多かった。一方、⑩事務サービスに対する肯定的な意見は少なかった。②教育内容、⑦食堂、⑤キャンパス周辺の環境は「良くなかった点」に挙げる卒業生が多い。

表 3. 大学で良かったもの、良くなかったものを次の項目から 3 つ選択した結果

項　　目	良かった点	良くなかった点
①教員のサポート	22	12
②教育内容	19	22
③教育施設	20	15
④キャンパスの雰囲気	20	19
⑤キャンパス周辺の環境	12	21
⑥図書館	31	5
⑦食堂	15	22
⑧ラウンジ等	11	12
⑨キャリアサポート	29	9
⑩事務サービス	6	13
⑪課外活動	25	9

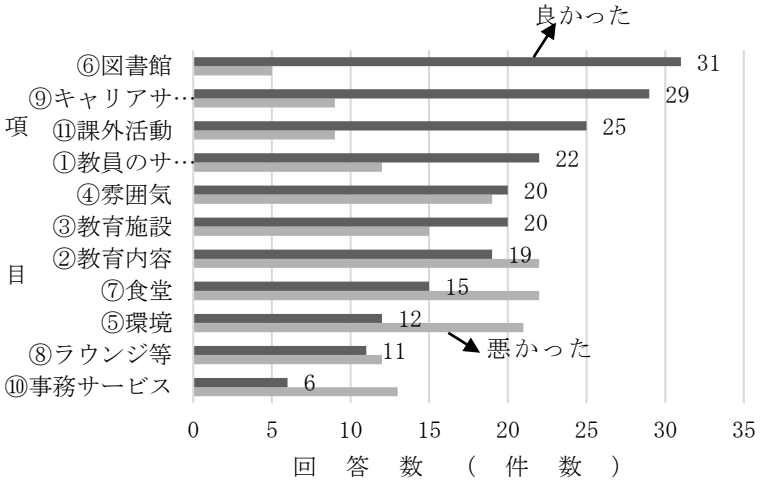

図 3. 大学で良かったと思ったこと、良くなかったと思ったこと（良かった点の多かった順）

④ 課外活動の有無と大学生活の充実度との関係について

課外活動の有無と大学生活の充実度との関わりを調べるため、課外活動の有無によって、卒業生を 2 つのグループに分けた。在学中に課外活動を行った卒業生の多くは、大学生活は「非常に充実していた」と答えていることから、在学中の課外活動の有無が大学生活の充実度に与える影響は大きいといえる（表 4）。

表 4. 課外活動の有無と大学生活の充実度とのクロス集計

大学生活の充実度	課外活動の有無		計
	あり	なし	
1. 非常に充実していた	31	8	39
2. どちらといえば充実していた	13	28	41
3. あまり充実していなかった	2	4	6
4. 充実していなかった	1	4	5
計	47	44	91

３．卒業生アンケート（短期大学部）

(1) アンケート回答者の属性

14 名の回答者において、23 歳が 7 割を占めた。業種は、製造業、医療福祉業、サービス業が多かった。職種は営業・販売職および一般職（事務）が約 8 割を占め、12 名（86%）が正社員である。また、在学中の課外活動の有無については、「活動していた」が 6 名（43%）であった。卒業時に就職した 12 名のうち、1 名が 2 年以内に離職・転職したと回答した。

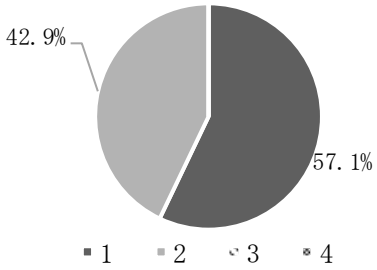

図 4. 大学生活の充実度について
註）1. 非常に充実していた、2. ある程度充実していた、3. あまり充実していなかった、4. 充実していなかった

(2) 調査結果の要約

① 大学生活の充実度

「非常に充実していた」の割合は 57.1%、「どちらかと言えば充実していた」の割合は 42.9%であり、回答者全員が肯定的な回答を寄せた（図 4）。

② 大学時代の学習が全体として現在役立っているか

「学習が非常に役立っている」と 5 名（35.7%）が、「ある程度役立っている」と 9 名（64.3%）が回答し、回答者全員が肯定的な回答を寄せた（図 5）。

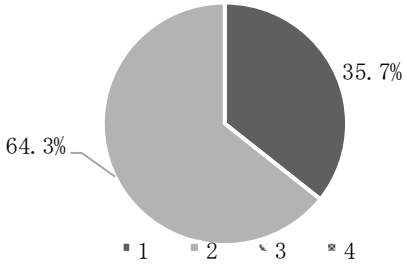

図 5. 大学時代の専攻科目、語学、共通科目（一般教養）、ゼミナールなどで学んだことや経験は、総合的に、どの程度役立っていると思いますか。
註）1. 非常に役立っている、2. ある程度役立っている、3. あまり役立っていない、4. 役立っていない

③ 大学で良かったもの、悪かったものを選択する設問

大学で良かったと思うこと、悪かったと思うことを 3 つ選択する設問に対する結果を表 5 に示した。また、図 6 は大学で良かったと回答する卒業生の多い順に並べ替えたもので、その項目を悪かったと答えた件数もあわせて示した。①教員のサポート、⑨キャリアサポートを「良かった点」として挙げる卒業生が多い。また、施設面では、⑧ラウンジ等、③教育施設を挙げる卒業生が多かった。⑥図書館が良かったと回答した卒業生は 1 名であったため、授業などで図書館を積極的に活用する機会をつくる必要があるだろう。⑤キャンパス周辺の環境や⑦食堂は「良くなかった点」に挙げる卒業生が多かった。

表 5. 大学で良かったもの、良くなかったものを次の項目から 3 つ選択した結果

項　目	良かった点	良くなかった点
①教員のサポート	10	1
②教育内容	3	2
③教育施設	5	2
④キャンパスの雰囲気	2	0
⑤キャンパス周辺の環境	0	3
⑥図書館	1	0
⑦食堂	0	2
⑧ラウンジ等	6	1
⑨キャリアサポート	8	0
⑩事務サービス	2	0
⑪課外活動	1	2

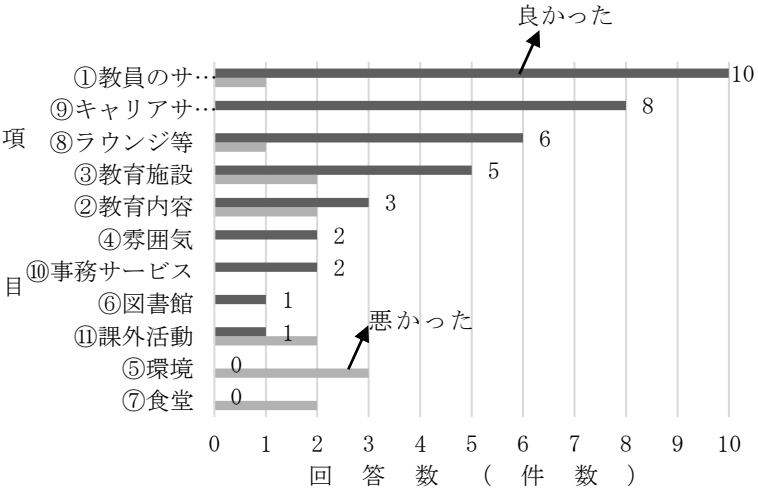

図 6. 大学で良かったと思ったこと、良くなかったと思ったこと（良かった点の多かった順）

④ 課外活動の有無と大学生活の充実度との関係について

短期大学部において、在学中の課外活動の有無に関わらず大学生活の充実度は高かった（表 6）。

表 6. 課外活動の有無と大学生活の充実度とのクロス集計

大学生活の充実度	課外活動の有無		計
	あり	なし	
1. 非常に充実していた	4	4	8
2. どちらといえば充実していた	2	4	6
3. あまり充実していなかった	0	0	0
4. 充実していなかった	0	0	0
計	6	8	14

４．企業向けアンケート

(1) アンケート回答企業の属性

回答した 86 の企業において、本社所在地は大阪府が全体の 36%を占めた。また、アンケートに回答した事業所等の所在地も大阪府が全体の半数を占めた。総従業員規模で見ると、1,000 人以上が 37 社で全体の 43%であった。また、業種は小売業、卸売業、サービス業の順に様々な業種の企業からの回答があった（図 7）。回答企業において本学卒業生は現在も継続して勤務しているか聞いたところ、78 社（91%）が「はい」と回答した。この他に、19 項目について採用における重要度を聞く設問と、6 項目のルール・マナーについて本学卒業生がどの程度身に付けられているか問う設問を設けた。

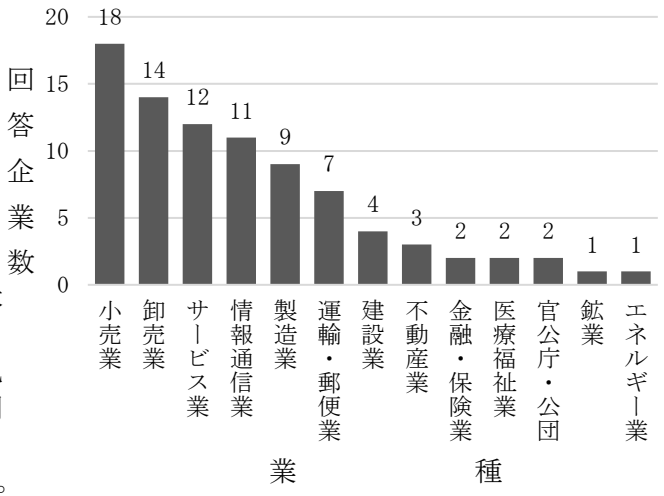

図 7．2022 年度企業向けアンケートに回答した企業の業種

(2) 12 の汎用的能力に関するアンケート

2022 年度は、企業に対するアンケート項目を改善し、教育開発支援センターが実施する成長実感調査で使用する汎用的能力 12 項目を用い、「企業が採用の際に重視する汎用的能力」および「本学卒業生が身に付けている汎用的能力」を聞くこととした。

５．12 の汎用的能力を使った実学 PDCA について

教育開発支援センターでは、在学生の学修成果の測定によって教育目標の達成度を確認するとともに、卒業生アンケートに本学の教育内容に対する満足度を問う質問を設け、卒業生からのフィードバックを得ている。2022 年度より、卒業生が就職した企業に対し、「企業が採用の際に重視する汎用的能力」および「本学卒業生が身に付けている汎用的能力」について聞くこととした。選択肢の汎用的能力は、在学生に実施している「「汎用的能力」に関する全学的な成長実感調査」の 12 項目と同一とした。これにより、卒業生および企業から本学の教育に対するフィードバックを得ることができるようになった。これは、教育開発支援センターが考える社会や時代からのフィードバックを本学の教育に還元し、本学の教育システムをチェックするという点検・評価、「実学教育型の内部質保証」の取り組みである。

汎用的能力に関する 12 項目は次のとおりである（①所属する学部に関する専門分野の知識、②情報分析力や問題解決能力、③リーダーシップの能力（統率力）、④人間関係を構築する能力、⑤他の人と協力して物事を遂行する能力、⑥日本社会や世界が直面する問題の理解力、⑦文章表現能力、⑧プレゼンテーションの能力、⑨コンピューターの操作能力、⑩時間を有効に活用する能力、⑪視野の広い見方をする能力、⑫自らを律する能力（自己管理力））。

(1) 身に付いたと思う汎用的能力（大学・短期大学部）

かなり身に付いた：5 点、やや身に付いた：4 点、どちらともいえない：3 点、あまり身に付かなかった：2 点、全く身に付かなかった：1 点として、平均値を算出した。

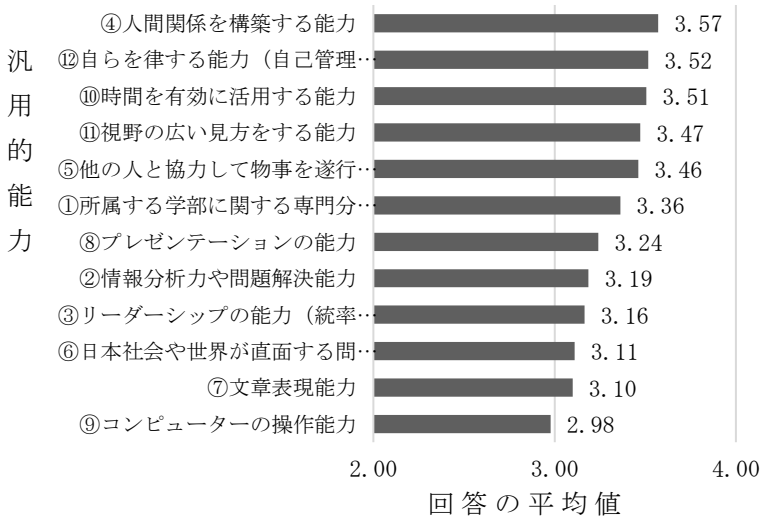

図 8. 在学中に身に付けたと思う能力（大学）

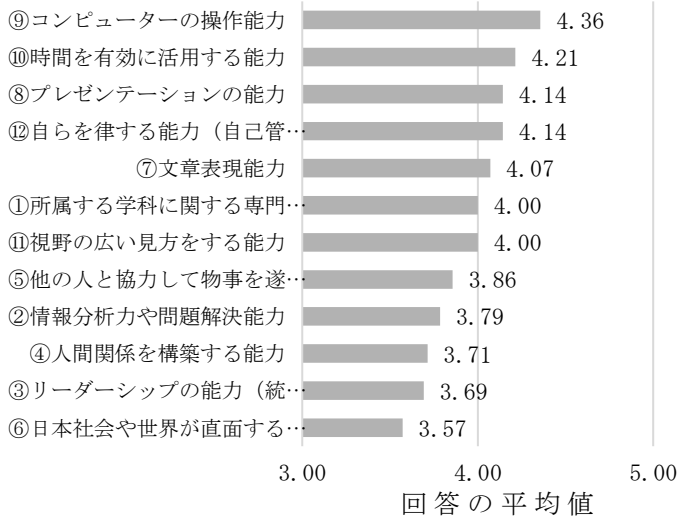

図 9. 在学中に身に付けたと思う能力（短期大学部）

大学の卒業生は、「人間関係を構築する能力」、「自己管理力」、「時間を有効に活用する能力」などを大学で身につけられたと評価しており、大学での勉学により視野が広がり、他人とうまくつながることができていることが伺える。一方で「コンピューターの操作能力」、「文章表現能力」、「日本社会や世界が直面する問題の理解力」はあまりに身に付かなかったと感じているようである。

一方、短期大学部の卒業生は、「コンピューターの操作能力」、「時間を有効に活用する能力」、「プレゼンテーション能力」、「自己管理力」などを大学で身につけられたと自己評価している。「日本社会や世界が直面する問題の理解力」、「リーダーシップの能力」、「人間関係を構築する能力」はあまり身に付かなかったと感じているようである。

(2) 身に付ければよかったと思う汎用的能力（大学・短期大学部）

非常にそう思う：5 点、ややそう思う：4 点、どちらでもない：3 点、あまりそう思わない：2 点、全くそう思わない：1 点として、平均値を算出した。

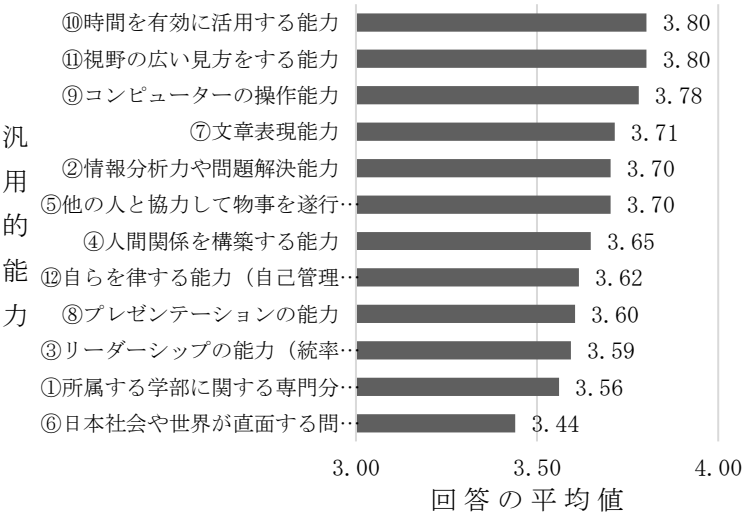

図 10. 在学中に身に付ければよかったと思う能力（大学）

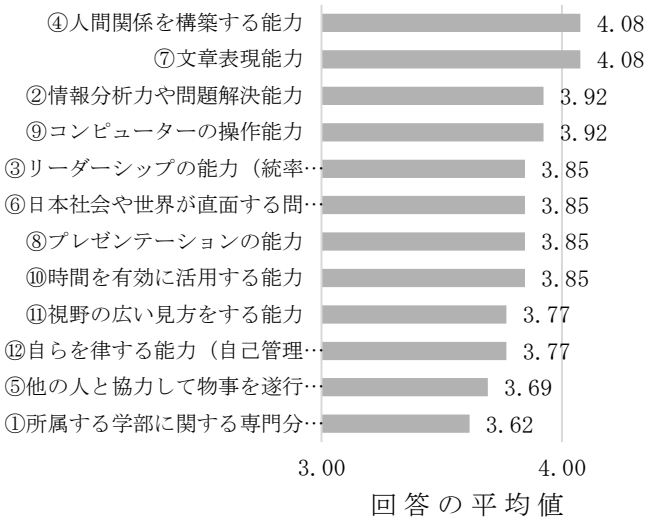

図 11. 在学中に身に付ければよかったと思う能力（短期大学部）

大学の卒業生は「時間を有効に活用する能力」および「視野の広い見方をする能力」をもっと身につけておくべきだったと感じているようである。続いて、「コンピューターの操作能力」および「文章表現能力」は社会に出て必要性を実感していると思われる。文章を書く課題やパソコンソフトを使用する課題を積極的に課し、スキルアップのために学生がフィードバックを得る機会を増やすことが有効であろう。また、短期大学部の卒業生は、「人間関係を構築する能力」、「文章表現能力」、「情報分析力や問題解決能力」において、社会に出て必要性を強く実感していると思われる。これらの能力をより伸ばすようなカリキュラム開発が求められていると言える。

(3) 本学卒業生が身に付けている汎用的能力（企業）

企業に対し、5 点尺度で聞いた。優れている：5 点、やや優れている：4 点、普通：3 点、やや劣る：2 点、劣る：1 点として、平均値を算出した。

「他の人と協力して物事を遂行する能力」、「人間関係を構築する能力」、「自らを律する能力（自己管理力）」において良く身に付いていると回答された。一方、「日本社会や世界が直面する問題の理解力」、「文章表現能力」、「所属する学部に関する専門分野の知識」への回答の平均値は低い結果であった。

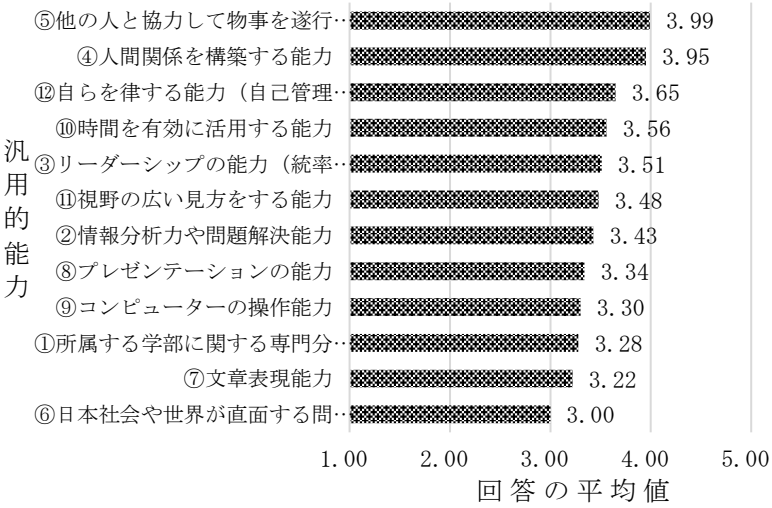

図 12. 本学卒業生が身に付けている汎用的能力（企業）

(4) 企業が求める汎用的能力

企業に対し、5 点尺度で聞いた。重視する：5 点、どちらかと言えば重視する：4 点、どちらとも言えない：3 点、どちらかと言えば重視しない：2 点、重視しない：1 点として、平均値を算出した。「人間関係を構築する能力」、「他の人と協力して物事を遂行する能力」、「自らを律する能力（自己管理力）」、「視野の広い見方をする能力」が上位に挙がった。また、「所属する学部に関する専門分野の知識」、「コンピューターの操作能力」、「日本社会や世界が直面する問題の理解力」における重視の度合いは低い結果であった。

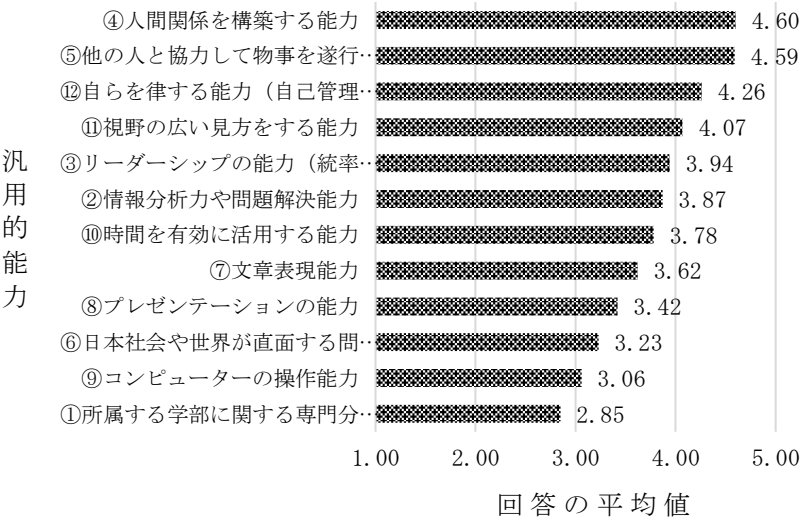

図 13. 企業が求める汎用的能力

６．まとめ

卒業生アンケートで本学の教育で身についたこと、大学で身につけておくべきだったことを問うことにより、卒業生が社会人として必要性を感じる「社会や時代の中で求められる能力・資質」が明らかになる。2022 年度からは卒業生に加え、卒業生が就職した企業に対しても「12 の汎用的能力」を基にしたアンケートを実施し、実業界から本学に求められるニーズの測定を開始した。在学生、卒業生、企業に対するアンケートに同一基準を用いることにより、より改善点の明確化が可能になった（図 14）。

2022 年度の結果を見ると、大学では、「④人間関係構築能力」、「⑫自己管理力」、「⑩時間管理力」が身に付いたという卒業生の実感は、企業が「よく身に付いている」と評価した「⑤他人との協力遂行」、「④人間関係構築能力」、「⑩時間管理力」と合致している。また、卒業生が「身に付ければよかった」と振り返る「⑨PC 操作能力」は、企業の本学の卒業生における評価において下位であった。次に、短期大学部の卒業生は、「⑨PC 操作能力」、「⑩時間管理力」、「⑧プレゼン能力」が「身に付いた」と実感している一方、「④人間関係構築能力」や「⑦文章表現力」を「身に付ければよかった」と感じていることがわかった。最後に、本学卒業生の就職先企業が人材採用において重視する事項は「④人間関係構築能力」、「⑤他人との協力遂行」、「⑫自己管理力」であり、「①学部の専門知識」は、最下位であった。学生が本学で身に付けた専門知識を高く評価するような就職先が増えることは、本学が実践する実学教育の質保証の観点からも望ましいといえよう。また、アンケートの精度をより高めるため、引き続き、アンケートの回答率を上げる工夫が必要と言える。

卒業生のアンケート結果から、大学では「⑪広い視野」および「⑨PC 操作能力」、短期大学部では「④人間関係構築」および「⑦文章表現力」を在学中に高めておくニーズが高いことが分かった。「⑪広い視野」の醸成には、大学における学修が社会とつながっていることを理解して、学部・学科で学んでいくことの意義を確認させることが必要と思われる。また、本学のゼミナール教育は、人間関係構築力を養う機会となっており、教員のサポートを「良かったこと」に挙げる卒業生は多い。引き続き、ゼミナールでの丁寧な個別指導や将来に向けた進路相談に加えて、パソコン操作を実践する機会をより増やすことができれば、さらに教育効果が高まると思われる。

調査へ協力いただいた卒業生、企業に感謝と御礼を申し上げるとともに、この結果をもって、学位授与方針やカリキュラムの見直し、就職進路支援に役立てることで、「実学教育型の内部質保証」として広い視野からの教育改善に取り組んでいきたい。

以　上

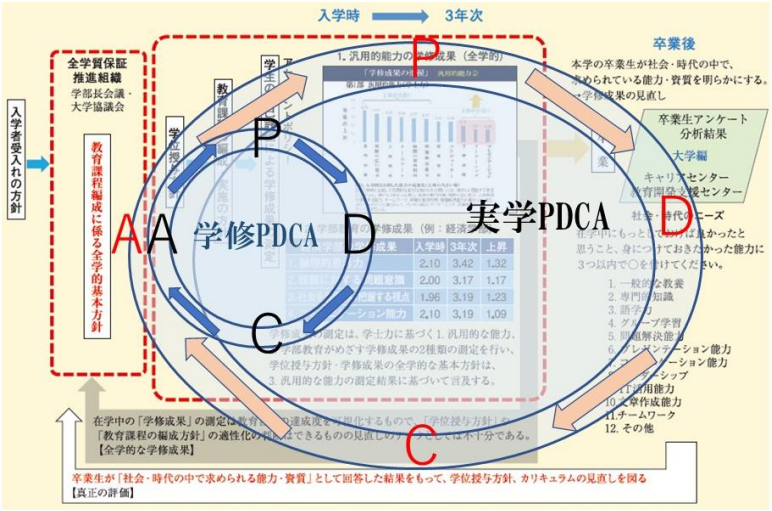

図 14. 学修 PDCA と実学 PDCA の模式図